

空梅雨が嘘のように、恵みの雨がどんどん降り続いています。ちょうど、大地のアプローチへの道端の花壇に、たくさんの宿根草や花を植えた直後でしたので、本当によかったです。お蔭で、素敵なアプローチ道が出来上がることでしょ。去年の秋に、サンクゼールのレストランの花壇を見て刺激を受けて、花畑や花壇を整備して綺麗にしようと思いついてから、それを始め、今ようやく形になってきました。一昨日は、ハーブ等を植えました。流行りの「ガーデニング」と言うには規模が大きくなってきており、農作業と言った方が近いのですが、早朝にこの花壇作り作業は豊かな気分させてくれます。来年、どんな風になっているか楽しみです。

そんな花壇を通りながら、家屋の建設が始まりました。朝、子どもたちはここで必ず立ち止まり、興味津々。家が出来上がっていくすべての過程を毎日見れることは幸せです。もちろん、業者の方も打ち合わせており、子どもたちを危険のない程度に巻き込んで一緒にやって下さるという事なので、楽しみです。地盤調査機械 転圧機械 重機 など、もう体験済みです。子どもたちの大好きな鉄筋の棒や釘を手のすることも間近です。家が出来上がるクリエイティブな過程は、大人も子供もわくわくするものです。「何か 仕事ない? お手伝いしない?」と気軽に業者の方々に声をかける子ども達は、可愛いです。



【イチロー】

建設工事が始まった。まずは、基礎工事。思えば、25 年前に、大地建設を夢見て、保育園でのサラリーマン生活を終えて、長男と妻と3人で実家に戻り、生活費を稼ぐために、日雇い現場に通い始めた先は、基礎工事屋さんであった。定年して農家をしていた父親と一緒に、弁当を持って、毎日現場作業に出かけた。基礎工事は、何もない土地に穴を掘りコンクリート等を入れる仕事で、雨も寒さも防ぐ手立てもなく、汚れる厳しいものであったが、毎日がとても新鮮でうれしいものであった。まずは、そこで働く人たちとの人間関係や素朴さ。子どものように喜怒哀楽があり（定年後の人や農業の人達がほとんど）、気楽で楽天的で、その日を楽しんでおり、過去への悔いや明日への憂いなどの悲壮感もなかった。それに、とてもクリエイティブな仕事だけに、覚えること、学ぶことが多く、2年後には、大抵の仕事も任せてもらえるようになった。お蔭で、現大地の基礎も、自分でやることのできた。

思えば、26 歳で東京町田市の保育園に就職して、子どもたちを連れて工事現場の近くを散歩していた時、通りがかりの親子がつぶやいた。「勉強しないと、あんな仕事をするしかないのよ」と。激しい憤りを感じた。学生時代からのアルバイトは、ほとんど現場労働だったので、「俺は、子ども達には、絶対そういう教育はしないぞ」と決意した。長野でも基礎工事の現場で働いている時も、汚い蔑むような視線や言動を浴びせられたことも多々あったが、根底にはこの気持ちが常にあった。物を作る素晴らしさ 美しさ 職人の誇り 人間社会は、いろいろな領域 持ち分 があり、それらが支えあい、絡み合っって営まれている。家作り一つとっても、たくさんの領域の人達がかかわり、完成していく。それだけでも、人間社会の縮図が見えるものである。

現在、大地の現場で進む基礎工事を見ていると、自分の姿がダブるし、自分もやりたい気分になる。それは、懐かしい過去の自分への回避的旅行気分になるからである。そして、働く人たちへの敬意や感謝を、子どもたちと一緒に 持ち続けたいと思うのである。それが、大きな大地の教育であらばと思う。

嬉しい事に入出入りする業者さんや建築会社の社長さんたちが、おっしゃっていた。「この子どもたちや親御さんたちは、本当によく挨拶をしてくれるし、気軽に話をしてくれる。とてもうれしいし、励みになります。街中の現場では、挨拶もしてくれない所もあるし、こちらから声をかけるのも憚ることもあるし、声をかけちゃいけないかなあと迷う時もありました。自分たちをとても大切してくれる雰囲気、大地にはあり、うれしくなります」と。とてもうれしかった。自分が、現場で働いていた時も、そんな事がありとてもうれしかったことを思い出した。

建設会社は、小布施であり（小布施は 狭いそして一体感のある町だけに）、大地 OB が多くいる関係上、大地関係に知り合いが多く、業者さんの隣家が大地 OB であつたりと、やはり世の中は狭い。今回の建設工事を通じ、学ぶ事、子どもたちに教えることは多い。

「自分でできることは（可能性のあることも）自分でする」ことをモットーのしてきた私にとって、初めて、全てを他人にやって頂く今回の家作りである。「さすがに、年を取りましたね、気力がなくなりましたか」などと言われるが、今回は、家作りに関わる人たちに喜んで頂き、幸せをシェアするのと、自分は、先述したように、子どもたちと客観的に教育的要素を持って、人間社会の大切さ 偉大さ 職人さんたちの素晴らしさを伝えていけたらと思っている。そして、一緒にポイント毎に子どもたちと手伝い、楽しみたい。時には、青ちゃんも傍らで本格的にやって、すごさをみせたやりたいなどと、作戦を練っているのである。

「小さいことを積み重ねることがとんでもないところにいくだけ1つの道」、座右の銘としているイチローの言葉です。

これは、マッキンリーに登った長男の言葉である。まさに、家作りは、何もない原っぱに、毎日細々とした仕事を、自然とと共に汚れたり濡れたりしながら築き上げて、そして、ある日、囲いのシートや足場などを外したら、見事な家が見えてくる というドラマであり、文字通り、とんでもない建物が完成している という雰囲気だ。

思い返せば、大地建設開始時、行政から援助や補助金なくして、日本一の子どものために最高級の施設を自分の手と力で作ってみせるぞと意気込んでいた（実は、今もそうであるが）ことを思い出す。「また、お父さん何か作っている」といつも子どもたちに言われていたことを思い出す。朝の作業を得意としている私は、そう言えば、子どもたちが学校へ出かけていく毎朝、何かを作っていたような気がするし、作業しながら「行ってらっしゃい」をしていた。朝ごはんは休日以外は一緒に食べていなかったと思う。現在は、末っ子が 朝作業の傍らを、自転車で登校していき、それを見送るのが日課である。こんな環境の中で育った子どもたちは、デスクワークをしないで、山小屋などで働きたくなるのは無理もないと思う。最近、どういう育て方をしたら、自由な一途な子どもたちになるのですかと聞かれることが多いが、それは 親が適当だから としか言いようがない。

そんな子ども達の中で、長男が20歳前後に「お父さんは、スマートにかっこつけた言葉をかざすよりも、現場でやってきて積み上げてきた泥臭さを自分の言葉で表現したほうがかっこいい」といつてくれた。これは、親として、人間として、自分の大きな転換点であった。シュタイナー教育や様々な教育をどのように大地に取り入れようかと学んでいた時期であったが、大地独自の里山でオリジナリティ溢れる教育、まさに 大地は大地、私達夫婦の在り方をそのまま自由に気持ちよく出して、築いていけばいいんだ と気づいた瞬間であった。

泥と汗にまみれながら、大地の3つの活動（お話絵本わらべうた・食育・自然里山活動）を積み重ねていこう。